武蔵野日曜集会

我と父とは一つなり
――ヨハネ伝第10章22～39節――

１９８４年９月30日（武蔵野）
小池辰雄

マイナスを天的なプラスに変える秘訣　信仰の極意　絶対恩寵の現実　宇宙の無の光　罪びとにして義人　やっていれば力が来る

【ヨハネ10・22～39】

22その頃エルサレムに宮潔の祭あり、時は冬なり。23イエス宮の内、ソロモンの廊を歩みたもうに、24ユダヤ人ら之を取圍みて言う『何時まで我らの心を惑わしむるか、汝キリストならば明白に告げよ』25イエス答え給う『われ既に告げたれど汝ら信ぜず、わが父の名によりて行うわざは、我に就きて証す。26されど汝らは信ぜず、我が羊ならぬ故なり。27わが羊はわが声をきき、我は彼らを知り、彼らは我に従う。28我かれらに永遠の生命を与うれば、彼らは永遠に亡ぶることなく、又かれらを我が手より奪う者あらじ。29彼らを我にあたえ給いし我が父は、一切のものよりも大なれば、誰にても父の御手よりは奪うこと能わず。30我と父とは一つなり』31ユダヤ人また石を取りあげてイエスを撃たんとす。32イエス答え給う『われは父によりて多くの善き業を汝らに示したり、その孰の業のゆえに我を石にて撃たんとするか』33ユダヤ人こたう『なんじを石にて撃つは善きわざの故ならず、瀆言の故にして、汝人なるに己を神とする故なり』34イエス答え給う『なんじらの律法に「われ言う、汝らは神なり」と録されたるに非ずや。35かく神の言を賜りし人々を神と云えり。聖書は廃るべきにあらず、36然るに父の潔め別ちて世に遣し給いし者が「われは神の子なり」と言えばとて、何ぞ「瀆言をいう」というか。37我もし我が父のわざを行わずば我を信ずな、38もし行わば仮令われを信ぜずとも、その業を信ぜよ。さらば父の我におり、我の父に居ることを知りて悟らん』39かれら復イエスを捕えんとせしが、その手より脱れて去り給えり。

●マイナスを天的なプラスに変える秘訣

我々は、マイナスのいろんなことに出会えば出会うほど――マイナスでもプラスでもいいですが――それを天的なプラスに変える秘訣を持っている。そういう力がある。これは

御霊でなければ絶対に来ない。御霊の信仰の証です。どうぞ、皆さんも――あの野球の選手みたいにスランプになってみたり調子が悪くなってみたり、そんなことはないんだ、こっちは――召団の人たちはみんなそういう人だということにぜひ成ってもらいたい。

22**その頃エルサレムに宮潔（みやきよめ）の祭あり、**

ヨハネ伝では、「宮潔」をキリストが終りになさった。他の福音書では先の方になっていますが、あるいは二度なさったかもしれない。私はなるだけ聖書をそのまま読んでいきたい。

時は冬なり。

これはエルサレムの各家で灯火をともす。非常に明るい。アンテオカス・エピファヌスというやつが宮を汚したから、特に宮潔めということが必要になったわけです。大体、12月の半ばから一週間くらいやるらしい。最初に始めたのが紀元前165年です。独立戦争をしたユダス・マカデウスというのが宮潔めを始めた。マカデウス王朝というのがちょっと続きますから。

23**イエス宮の内、ソロモンの廊を歩みたもうに、**24**ユダヤ人ら之を取圍（かこ）みて言う『何時（いつ）まで我らの心を惑わしむるか、汝キリストならば明白（あらわ）に告げよ』**

こんな生意気なことを言う。「惑わす」と言っている。「メシヤならばはっきり言え。メシヤは地上に王国を建てるはずなのに、お前のやっていることは何だ」というようなわけです。

25**イエス答え給う『われ既に告げたれど汝ら信ぜず、わが父の名によりて行うわざは、我に就きて証す。**

「ちゃんと父の名おいて、名にあって、自分はやっているんだ。それは業が証しているではないか。何を見ているか」

というわけです。「名によりて」というのは、

「名に在って、名の中において」

ということです。我々はキリストの名に在る。「キリストに在って」（エン・クリスト）ということと、「キリストの名に在って」（エン・ト・オノマティ・クリスト）とは同じことですよ。内的関係にある。内的相互関係です。いつも言っている「一如」の世界です。信仰とはそういう一如であるということ。「信仰」なんていう言葉はもう我々には要らないんだ。これは現実なんです。霊的現実なんです。

「我が父の名にあって行う業が私のことを証しているではないか」

と。その業が見えないですよ、もちろん。彼らは御霊がないから。

「変なことをしているな。変わったことを言っている」

くらいしか思いやしない。これはパウロがコリント前書の始めの方で、

「我々の言葉は御霊が来なければ分からないんだ」

と言っているとおりです。

26**されど汝らは信ぜず、我が羊ならぬ故なり。**

「我が羊」というのは、

「私の言うことを本当に全身で受けとって従ってくる者」

です。だから、キリストは「神の羔（こひつじ）」で、我々はまたキリストの子羊というわけです。

27 **わが羊はわが声をきき、**

もう声を聞けばすぐ分かる。電話をかけて名前も言わないのに、私の声を聞いてすぐ分かる人があるけれども。

我は彼らを知り、彼らは我に従う。

この「知る」は頭ではない。「知る」という言葉は頭では困る。全存在が、説明でなくて、パッと来てしまうわけです。そういうのを「知る」という。「父に従う」ということは、

「御意（みこころ）を現ずる」

ということ。「従う」とは行動的なんだからね、ただ聞いているのではない。行動的に神さまの意を現ずる。体現してなければ「従う」とは言えない。

「まぁ分からないけれども、従っておきましょう」

なんていうのが普通の「従う」という意味だが、聖書の「従う」というのはそんなのではない。これはいやいや従うのではない。喜んで従う。従うところには力が来ている。力が来るから、また従える。力従している。歩けるんです、歩く力が来ているから。キリストは一歩先を歩いている。こちらはその引力で歩いている。ちっとも疲れない。

●信仰の極意

28 **我かれらに永遠の生命を与うれば、彼らは永遠に亡ぶることなく、**

強い言葉だね。

「あの羊たちに――お前たちに――永遠の生命を、死んでも死なない生命を与えているから、彼らは永遠に亡びることがない」

と。私たちは永遠に亡びない。相対的な生死を超越して本当の生の中に入っているというわけだ。ここのところは非常に力強い。

又かれらを我が手より奪う者あらじ。

私から奪うわけにはいかんよ、どんなサタンだってダメだと。

「サタンよ、退け！」

と。どんなに敵がきても、どんなにけなされても、迫害されても、キリストからは奪われない。

29 **彼らを我にあたえ給いし我が父は、一切のものよりも大（おお）なれば、**

「神さまはすべてのものよりも絶大である。神さまにかなうものはないよ」

と。キリストの言葉は、これを読んでいるだけで力が来ちゃうでしょ。だから、

「聖書は食らいなさい。ドラマの中に入りなさい」

と言うわけです。

誰にても父の御手よりは奪うこと能わず。

たたみかけて書いてある。

30 **我と父とは一つなり**』

ヨハネ伝10・30というのは覚えやすいでしょ。

「我と父とは一つである」

と。もう全く一如。一如、即如。一つに重なってしまっている。我々がまたキリストの中に一つになり三重の環（わ）になる。これが信仰の極意の姿です。これはみんな聖霊だから、これができる。

「主と我は一つなり」

と。これが信仰告白の最後のところです。

「主と我とは一つなり」

とは本当は、初めにして終りなんです。なかなか、初めはここはいかないけれども。

こんなことをいわゆる教会や無教会で言ったらダメなんだ。

「我々は汚れた者であって、一つになんかなれない。贖いを信ずる。十字架だ」

なんて、観念でものを言っている。十字架を通ったから一つになれる。十字架という門を通ったから一つになるので、何を言っているか。十字架という門を通って、私たちを中に入れてくださった。そうしたら、聖霊に在って一つなってしまったということ。キリストは罪びとを一つにしてしまうんです。

「こちらが偉くなったから、聖書を勉強したから、人を愛したから、立派になったから、だから、一つになる」

なんて、そうじゃないよ。十字架はそんなものは何者ともしない。

キリストは、自分を何者ともしなかったから、父と一つになったんでしょ。

「わが意にあらず、汝の意志を。御意がこの破れ器に成ってください」

というのが、一つの世界なんです。

「もうお前を一つにしたから、いよいよ一つになれ」

ということなんです。こっちから成ろうとしたのではないですよ。キリストの方で一つにしてくださった。

「もう、一つじゃないか。お前をちゃんと抱きかかえているじゃないか。いよいよそれらしくあれ！」

と。これだけのはなし。

「我と父とは一つなり。主と我は一つなり」

と。これを瞑想して祈っていれば、その一如の世界から限りなく展開していく。何でもできる。行き詰まりを知らない。「何がどうなったっていい」ということになる。

●絶対恩寵の現実

それはもう光風霽月（せいげつ）だよな。今日の秋の空みたいに晴々としている。私は木や草や花を見れば、それと一つになる。「ああ、きれいだなぁ」でなくて、

「ああ、一つになったなぁ」

と言う。本当の美というのはそういう世界です。これを「如美」という。本当の美の世界。柳宗悦が書いている。

美醜をわけている世界はまだ本当の美の世界ではない。相対的な判断の世界は最後の世界ではないんです。義（ただ）しき者にも義しからざる者にも、直き者にも直からざる者にも、聖者にも罪びとにも、一視同仁にもっていく。そういった差別をしない。相対的な差別があっても、そんなものは乗り越えてしまう。そして、みんなそれぞれのあるがままの姿で、そして本当のところへ持っていく。無策。策はいらんと。だから、陶工が何気なく作ったものに傑作があるのはそのことです。

「さぁ、うまいものを作ろう。ここのところはどうだこうだ」

と、いわゆる作られたものはダメなんです、どんなにきれいに見えても。全存在が打ち込まれているかということです。

だから、

「自然は素晴らしいなぁ」

と言うんです。なぜ、自然は素晴らしいか。風と波と雨と日の光で、自由自在にしてできあがっている。木や草の方では何も自分でもって工作していない。そういう姿。自然の色彩の世界には不調和がないそうだね。こういう細かいものには小さな可愛い花が咲く。かすみのように。どれをとってみても、それ自身が比較を絶した美の世界なんです。あるがままの姿に美がある。だから、小さな子供が本当にあどけなくものをしたり、言ったり、歌ったりしている姿がなぜ素晴らしいかというと、

「幼児（おさなご）の如くならずば、天国に入るを得じ」（マタイ18・3）

とはあのような分別未然の世界、そこが天国だぞと。キリストはちゃんとそこを見ておられた。

「お前たちもそういったパラダイスをもう一遍取り返せ。そのためには自分を何か

と思ったらダメだぞ」

と。流れるように、湧くがごとくにという、そういう在り方が、人間においては美であり、善であり、うるわしき魂です。善であり、真である。真善美もそこにおいては一つなんです。

大詩篇を夢見ているとね、眼が冴えてしまったりするよ。私はそのうちにおかしくなるかもしれないね。「おかしくなる」とはキチガイではないよ。ここで語ろうとしても、異言の他に出なくなるかもしれない。

「我と父とは一つなり」

「主と我とは一つなり」

これは絶対恩寵の現実ですよ。「自分で成った」なんて思うのではない。絶対恩寵の現実。キリストが一つにしてくださっている。そのことに気がつくだけのはなし。

「なかなか、一つになれません」

なんて。それは成れないよ、誰だって。こっちから成ろうとしたって、成れるものか。

「お前を私は一つにしているではないか。何を考えているか」

と。画然として悟る。禅宗みたいだ。いいですね。そういう気合が――気合と言ったらおかしいけれども――そういう気合がのみこめないと、いかないんですよね。

それは自分でもってしっかり実存し、しっかり祈っていくだけです。鍛えられていく。実存が、祈りが、一つにするのではない。一つにされているという事態に気がついて、いよいよ実存せしめられ、祈らしめられる。こういうことですから。いつも、恩寵が先なんです。

太陽の光が、光熱が、あの引力がなくて、どうして地球がありえますか。完全に太陽という存在は恵みの存在、力ある恵みの存在ではないですか。それと同じことですよ。我々が信ずるの信じないのと、そんなことに関わらず、神さまの方ではちゃんとつかまえているのに、引力で引っ張っているのに、どこを見ているかと。こういうわけです。

●宇宙の無の光

31 **ユダヤ人また石を取りあげてイエスを撃たんとす。**

「父と我とは一つなり」なんて言ったものだから、これは瀆言だというわけだ。それは旧約の信仰では、律法ではもうどうにもならない。預言者たちはこのキリストにでっくわしたら、びっくりして平伏すだろうね。

32 **イエス答え給う『われは父によりて多くの善き業を汝らに示したり、その孰の業のゆえに我を石にて撃たんとするか』**

どれが悪いんだと。

33 **ユダヤ人こたう『なんじを石にて撃つは善きわざの故ならず、瀆言の故にして、汝人なるに己を神とする故なり』**

「父と一つなり」なんて、お前は自分を神だと思っているから、とんでもないはなしだと。キリストは神さまのことを「父、父」と言っている。だから、「子」なんだ。同質なんです。子だから同質、やっぱり神なんだ。

我々だって、神の似姿に造られている。我々も本来、同質なんだ。神性を持っている。本来、神の性質をいただいている。

「衆生悉く仏性あり」

と仏教でも言うではないですか。誰でもがみな仏性を、仏の性を持っている。そのことに気がつかないのが迷いで、その迷いからさめろという。仏教はそっちの方だ。同じなんだよ、

キリスト教だって。人は本来、神の似姿につくられている。ゲーテはその「エーベンビルト・ゴッテス」（神の似姿）というのが好きなんだ。

「人は神の似姿につくられている。それに気がついて、神のうちに生き動き在ればいい」

と。こないだの『エン・クリスト』20号の私の詩がそうです。

「……

神なる源泉と一如なる

キリストがそう。

霊的な生と動と存在に於てこそ

宇宙の無の光が現はれる。」（『無の光』［独和対照］１９８４年８月４日）

この「宇宙の無の光」という言葉でみんな躓いてしまうんだろうな。これを本当に体現したのはキリストとお釈迦さんだけだ。

「何だって、小池先生は、『無、無』なんて言うのか。無駄なはなしだ」

なんて（笑）。無駄じゃないんだよ、これ。

表現しがたきもの、憶測しがたきもの、これはみな「無」なんです。私の「無」という言葉は非常に内容がいろいろありますから、間違えては困るよ。無限定なるもの、無量なるもの、みんなこれを「無」という言葉が表している。その光。それを無量とか無限とか何とかかんとかと言うが、あとに言葉は要らない。だから、究極は「無」という言葉になってしまう。この「無」は「無い」というのではない。私が無いと、これは全宇宙があるんです。宇宙的なんです。宇宙的実在、それが「無」という。無の光が現われる。神のうちに生き動き在るときには、その人をして無量のものが現われる。こういうのは私は瞑想して書くんですからね。頭で書いているのではない。ドイツの神秘家の中には、「闇の光」なんていう言葉もあるくらいだ。

●罪びとにして義人

34イエス答え給う『なんじらの律法に「われ言う、汝らは神なり」と録されたるに非ずや。

この「神」というのは複数です。「汝らは神々と言っている」と。これは詩篇82篇6節です。ちょっとこれはキリストの引用の仕方がおもしろいんですけれども。

「6**我いえらく、なんじらは神なり、なんじらはみな至上者の子なりと。**」（詩篇82・6）

ね、面白いでしょ。これをつかまえてきた。

「**我言えらく、汝らは神々である、汝らは至上者の子たちであると**」。

「1**かみは神のつどいの中にたちたもう。神はもろもろの神のなかに審判をな**

したもう」（詩篇82・1）

という。『ヨハネにおける神々』という本があるくらいだからね。

「ちゃんと旧約で神々と言っているではないか。神の子じゃないか」

と。大体、私たちは「神の子」ですよ、似姿につくられているんだから。何も不思議なことはない。ただ、それが堕落してしまって、その神の神性をすっかり汚してしまったから、いわゆる「罪びと」になってしまった。けれども、本来、神々なんです。それを取り戻せと。

「私自身が父の子であると、そして神であると言って、何が悪いか。お前たちも本当は神々なんだ」

と、キリストはそう言うわけです。逆にやっつけてしまう。この「律法」というのは詩篇のことです。非常にはっきりしているでしょ。

35 **かく神の言を賜りし人々を神と云えり。聖書は廃(すた)るべきにあらず、**

旧約聖書はちゃんとその真理性を持っている。

36 **然るに父の潔め別ちて世に遣し給いし者が「われは神の子なり」と言えばとて、何ぞ「瀆言(けがしごと)をいう」というか。**

その通りです。

「私はちゃんと神さまに聖別せれた人間だよ」

と。聖霊を賜っているのが、聖別されているということ。聖霊を賜っていることですよ、聖別というのは。聖とされた者。だから、罪びとにして聖徒なんだ、我々は。ルターは

「罪びとにして義人」

と言ったけれども、あれは、

「信仰によって義とされる」

ということからきた。彼は、「義人、義人」と言っている。

「義人なし一人だになし。ただ一人の義人はキリストだ。けれども、信仰によって義とされたから、我々は罪びとであり、かつ同時に義人である」

と。ルターの言葉です。罪びとであると同時に聖徒である。何もカトリックの「聖者」ばかりが聖徒ではない。まぁあれは相対的な判断で、ああいう立派な人を聖者と言うことはわかるけれども、我々は本質的にはみんな聖徒なんです。聖とされた者。

「贖われたる者がシオンの新しき道を行く」

と、イザヤ書53章にあるとおり。「贖われたる者」と同じことです。

詩篇80篇14節に、

「14 **ああ万軍の神よ、ねがわくは帰りたまえ……**」（詩篇80・14）

という言葉がある。

「神さま、あなたが帰ってください。我々は帰り行くんだけれども、神さま、あなたが帰ってください。それでなければ、帰れません」

と。これが信仰の一番深いところですよ、「主よ、帰り給え」という言葉は。
「キリストよ、帰り給え」
と。エレミヤもそういうことを言っている。幼い子が転んで動けなくなって、
「お母さん、こっちへ来てよ」
と言う。その母親は行ってやるんだよな。そうすると、立ち上がって喜んでいる。子供と同じなんですよ、信仰の本当のところは。力んで何かをしようと思うから、くたびれてしまうだけのはなし。しかし今度は、力を得るとエライことになる。

●やっていれば力が来る

37 **我もし我が父のわざを行わずば我を信ずな、**
「私は、父を信じているのは、必ず現象するんだ」
と。これが信行一如ということ。初めに信仰あり、初めに行為ありと。だから、
「**証者たれ**」
とキリストが言われた。
「聖霊を受ければ、汝らはわが証人とならん。地の果てまでも行け。世の末までも行け」
と言う。証人でないものはクリスチャンでない。プロテスタントが
「信仰によって義とされる」
というお題目でお終いになっているから、いつまでたっても始まらないというはなしだ。何もひとの悪口を言っているのではない。プロテスタントの通弊がそこにあるから、
「それではダメだ、しっかり行いなさい」
とカトリックは言っているわけだ。ユダヤ教でも、「行為（おこない）、行為」と言うものだから、
「そうではない。信仰だけだ」
とパウロが言った。「信仰だけだ」と言ったパウロが一番素晴らしい証人ではないですか。これは本当の信だから。
「**行為（おこない）によっては義とされない。信仰のみだ**」
と言ったパウロが本当の信の世界だから、あの大伝道をやった。仆れるまで。
人間はいろんなことでゴタゴタするけれども、自分で本当にそういった行動的な証人的なクリスチャンでなければ、力が正直来ないですよ、それをやってないと。また、やっていれば力が来る。力が来れば、やらざるをえない。そういうわけです。それはみんな本当の意味における愛の力です。創造の業はみんなこの愛の業です。
38 **もし行わば仮令（たとい）われを信ぜずとも、その業（わざ）を信ぜよ。さらば父の我におり、我の父に居ることを知りて悟らん**』
それでやっていると悟ることになるぞと、懇ろに仰っている。

「私が分からなければ、業は分かるだろう。私が黙っていれば分からないけれども、何かやっていれば分かるだろう。この業は自分でやっているのではない。父の中にいる業である」

と。

「父の我に居り、我の父に居る」

とはっきり言っているんだ。

「この相互内住関係をお前たちは知って悟るであろう」

と。だから、私たちはキリストと一つにならなければ、業は出てこない。つくられた業は本当の業ではないから。止むにやまれざる業です。やむを得ずして為す。

「私はかく為ざるを得ない」

とルターが叫んだのは、あれは聖霊の力だよね。

39 **かれら復イエスを捕えんとせしが、その手より脱れて去り給えり。**

どっこいそうはいかん、まだ時は早いよと。もう説明のしようがないですよ、中身があまりに素晴らしくて。キリストは、

「我と父とは一つなり」

と。そして、我々は、

「主と我とは一つなり」

と。これが我々の信仰の現実であるということです。絶対恩寵の現実ですよ。それでもって――思い込みではなく――本当にその祈り込みでもってその中に入ったら、力が湧くし、創造的なことが始まるし、人は助けるし、何でも出てきます、ここからは。だから、証人になるわけです。「一つなり」と言っても、証人でなければ、それは一つではないですよ。一つの人は必ず証人であるんです。

『エン・クリスト』をカバンの中にでも入れて、「ああ、この人には読ませてやろう」と、本当にやってくださいよ、その伝道を。

「まぁ、集会に来なくてもいいから、とにかくこれを読みなさい。来たかったら、一遍来てごらん」

と。それは手当たり次第に人にやるということではない。何か少ししゃべってみて、「ああ、この人は」と思ったら、

「まぁ、読んでごらんなさい」

と。それをやらなくてはいかんですよ。無駄でもいいから。もし、そういう意欲がないとすれば、本当にあなた方は証人にならなければ、もう集会はやめるよ。言葉はちょっと激しいけれども。私は前に集会を三度ばかり解散したことがある。祈って来いと。それで進んで行ったことを覚えています。もう、私は歳取ったから、そんな乱暴なことはしませんけれども。どうぞ、皆さん、甘えないように。